

朱円をつくった二人の代表者 —羽田野耕三・永野酉吉の尊い足跡を遺して—

日置順正

099-4124斜里町字朱円, 郷土史研究, 開拓二代九十一才

HATANO Kozo & NAGANO Torikichi, the two great men doing for a
development of Shuen area, Shari-cho, Hokkaido, Japan

HIOKI Junsho

Shuen, Shari-cho 099-4124, Japan

口上に代えて～朱円をつくった二人の尊い足跡を遺して

一口に偉い人と言っても、仲々難しい。例えば昔の開拓期のこの朱円に人交際（つきあい）がよくて優れた腕前を持った野鍛冶屋が居たとしたら、当時の農家にとっては神様に近い有難い存在であったろうし、又昔は今日のように何でもかでも役所がやってくれなかったので自分等の住む地域づくりは自分達の奉仕作業が多かった。そのような時、口は下手でも常に先頭に立って、汗まみれになり、黙々と働く人の姿を見ると「偉い人だな」と感ずる。従って偉い人との定義は本来は容易でないと思う。私自身そのように認識をしながら、敢てここにその視評を乗り越え後世の朱円の人達に「この時代には、このような立派な人達が居られそのお陰で町内最高の地域づくりをして下さったのだ」ということを伝えることは、そのことを知る数少ない二代目の一人としての責任とも考えるし、と同時に、開拓時代の尊い郷土史の一頁とも思考する。

明治十年鈴木養太によって拓き始められた朱円の西区に次いで移住者が入ったのは二十二年遅れて以久科南であるが、その頃己に西区は二十戸以上の部落形成がなされていて、新天地を求めて優秀な人材が多く入っていた。議会議員関係者みても、

大正四年行はれた斜里村の第一回の村会議員の（小清水・清里分村前の広い区域）選挙十二名の中に朱円から二名出ているし、次回の大正六年の選挙には十二名中実に三名とゆう驚くべき結果が出ている。このように議会議員のみが突出しているのみでなく、斜里村が町へと時の流れに併せて発展してゆくわが郷土の凡ゆる面に多士剤々の人々が活躍されている。そのような中での二名であるのでここで特定するについては「中のうちの二名」として諒解頂きたい。

私は平成七年僚友羽田野北雄君と相図り、これと全く同じ考え方から、斜里町農業の始祖であり、朱円の子弟教育の生みと育てに生涯の愛情をかけた「鈴木養太」の偉大な足跡を、朱円に住われる今日の方々にお伝えすべく二十頁の小冊子を作って皆さんにお届けした。今回は都合上、私一人の企画でその第二回目である。先にも書いたが、時が経つにつれ埋もれ、失われてゆく郷土の歴史を知っている者が伝えることはその人の責任と考えて拙い筆をとった次第である。

羽田野耕三は数多い公役職を背負い
続け朱円の歴史をつくった男

羽田野耕三は岐阜県郡上郡八幡町出身で、明治

背負いきれぬ位の公役職を担いながら構想の迅速、積極的な発言、責任ある行動、その上、人格高潔で信望篤い人であった。別表に有るように町以外からの役職の他、朱円地区の育てゆく過程で必要であった役職は殆ど彼の温い手を経ないものはないと言ってもよい。

三 産業組合活動

大正七年（第一次欧州大戦による豆景気のまだ醒めぬ頃）網走管内で三組合中の一に産声をあげた朱円産業組合は本道の産業組合史の中でも特記事項であろう。このような避地でのこの快挙が出来たのはそれなりにその土地にそれをつくり上げた偉大な人物が存在したお陰である。同年度にこれも避地の上滑りに管内三組合中の一つの組合が設立されているが、ここには後に道共済連合会長で、その後参議院議員になられた岡村文四郎が居られた。

何処でも只の荒地には名草は生えない。この朱円の産業組合については別稿にも載るが、大正三年広島団体長として入地した山田諄一と、本道の主要地で既に産業組合が設立されていることを知っていた福島師範出身で後志地方から移転して来た飽寒別小学校長の永野西吉が主唱者であったが羽田野耕三も村会議員を始め部落の役職をつとめていたので、その先見の明と、必要性については前二者に劣らず、三者手を携えて早くから組合設立の要を叫び続けたのであった。

大正七年の設立当初組合長、山田諄一、代表監事永野西吉で発足したが羽田野耕三は他に公職が多かったので筆頭理事に就任している。然しこの組合も指導者の理想と社会情勢の認識に乏しい組合員との意識差、更に欧州大戦の終焉による豆景気の廃頽、春の風害の打撃など悪条件が重なり、農家経済は困窮を極めその運営は極度に悪化し、二進も三進も出来ない状態に陥った。そこで組合は大正十一年再建計画を樹て、組合長が永野西吉に代り、羽田野耕三は最も困難な対外債務の整理に当り、全役員無報酬で日夜奔走し漸く態勢を建て直し、昭和四年町内を一円とした産業組合が設立される母体となったのである。

実にそれまでの十一年間は、永野と共に全力を傾けて朱円産業組合を守ってきたのである。そして新しく設立された斜里産業組合にも理事七人の

うちの筆頭理事に就任し、その後も常務理事に、更には非常勤のホクレン理事もつとめ、名実共に今日在る斜里農協の礎石を築いたのであった。勿論その間村議を始め村及び朱円の多くの役職を兼ねての活躍であった。

四 農事改良実行組合の設立

大正十二年十二月、朱円全域約二百戸を以て始めて設立された。

大正十二年と言うと、朱円部落は疲弊のどん底に喘いでいた。何処にも度々出てくるが大戦の豆景気は消え去り、農産物価は暴落、只より僅かまし位、その上この地方は温暖期に入り、春先きの強い南風の吹き通しで作土が飛び、高台地方では播き直しする種子が無くなる農家も出る始末、実に惨憺たる状況であった。

当時は農業指導機関に農会があって、行政も農会も農村の更生対策に頭を痛めていた。その方法として先ず村内各部落に農事改良実行組合を組織し指導と実践に向わせたのであった。差し当たり朱円の組合は、大規模計画による防風林の施設、地力維持の方法の研究など荒れ果てた農業基盤の改良維持につとめた。その時の総会に於ける参集農家の胸中は実に悲壮なものであって、今日のように食べることが保証された上の決起大会などと訳が違ふ。高台、乾燥地帯の農家で自力で他に途を求めて逃げられる人は既に出て行ってしまい、動けない者の集まりなのだ。参考までに記するが大正八～九年頃この地帯の食べてゆく見込みの立たない農家は自分の土地を抵当にして拓銀から何百円かの金を借り、その金を持って土地を投げて何処かへ行ってしまい、年二回の返済金が滞って拓殖銀行の所有となった土地があちこち多くさんあった。所謂「拓銀流れ」である。

このようにして開催された総会に羽田野耕三は初代組合長に推されたのである。その時彼は朱円郵便局長の職にあって、専業農家ではなかったが、農業も兼業していた。村会議員を始め数多くの公役職を擔っていた多忙な彼に朱円の農家は生きる望みを彼に托し続けたのである。それは、彼が一切名利に走らず、皆のためにを目標に賢明な計画を樹て、只管に率先して実行するその尊い信念と姿勢を農家が住民が尊敬しての結果だと思ふ。私は昭和初期だが羽田野耕三がスコップを持って数



写真1. 最初朱円一円で組織された実行組合もその後、三区に分かれ、写真は中区組合の総会、昭和十年、表彰状授与記念。

人の人と東四線道路を三号を境にして南側は道路の東側、北側は道路の西側に落葉松の防風林の植樹をされている姿を今想い出すが、関係土地の古い方はその防風林の存在を頷かれると思う。彼は飾りものの役に止る人ではない。兎に角、慧眼と実践の人であった。大正十二年の暮れに組織された組合の責任者となった彼は次に来る、大正十四年町内で試作されたビート、亜麻に対する挑戦は矢張り彼が繋引車だった。

五 岐阜県一致同志会の結成

大正の初めこれも第一次欧州大戦の勃発によって本町の（本道全域）農家にも夢のような豆と澱粉の高値景気が到来した。その町内での集散地は冬の馬橋による網走までの運搬（通称網走通いと言ひ雑穀業者の買取保管中のものを大勢の農家の冬稼ぎ仕事）以外は斜里の下街であった。その上斜里沖には本州からの木材積取船が常に五～六隻停泊し、弥が上にも賑かな様相になり料理店（芸妓を置いた呑屋）が十件以上も建ち並ぶ繁昌振りだった。

当然のこととして金と暇のある処親睦、交流の芽が育ち、当時の斜里村には東北六県を始め、北

陸各県の県人会が茸のように誕生した。処が時は同じ頃であったが、この朱円にも岐阜県人会が結成せられた。然しこの県人会の目的は勿論、会員同志の親睦もあるけれど、その第一は互いに励まし、助け合い、あらゆる困難を乗り越えて開拓を成功するものであった。そのような大きな目的のもとに結成されたので名称も単なる県人会でなく明治維新の志士の集団名を思わせる「岐阜県一致同志会」と名命し主として岐阜県の郡上、武儀両郡出身者四十七名を以て大正四年十一月三日（明治節、明治天皇崩御の日）朱円小学校を会場にして華々しく結成せられた。

この時もその中心となって提唱、勧誘の情と労をとったのは羽田野耕三であった。斜里町には岐阜県出身者が多いが団体移民でない。大正四年に四十七戸とゆうと朱円の四分の一位であったと思うが、この同県人を何とかまとめて、お互い力を合せて幸せにしてやりたいとゆう、温情のある人であったことがわかる。そのような尊い人柄が彼をしてその後も多くさんの役職を預らしめる人望となって現れたのであろう。

県人会の詳細に伝えられる記録によると成程と快哉を叫びたい総会の方法をとっている精神的な

互助として年一回の総会は十一月三日の収穫も終えた日に決め、会場は四間も六間も解放(昔の家は大きかった)出来る家の廻り番にし、その日は県人会の男の日として、米の飯と酒を腹一杯吞ませ、食はせた。皆貧乏して米の飯も酒も呑めんのを慰めたのである。その頃は金銭的な援助は個人よりの借金以外になかったので会員は総会日に個人の出資金として金五円也を據出し希望者に極く低利で融通し合いそのうちその利子で総会の費用に充てていた。妙案である。

そのようにして羽田野耕三等が創ってくれた一

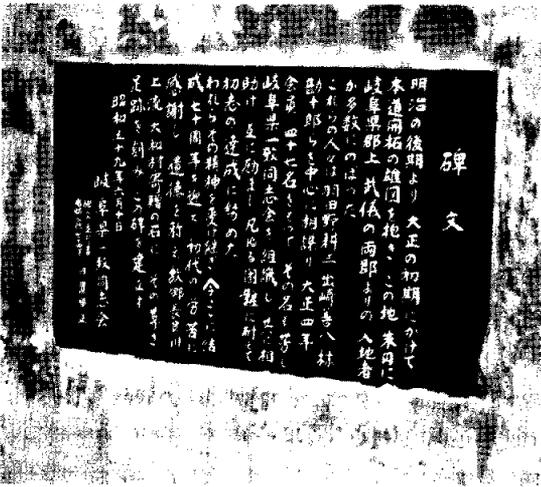


写真2. 羽田野耕三らの遺徳を讃える記念碑の碑文。

致同志会も今年八十六回目の総会を迎え、昭和五十九年結成七十年の記念に赤上神社境内に建立した郷土大和町寄贈の拝み石に大和村長山下運平の名筆による「岐阜県一致同志会発祥の地」の記念碑も十六周年になり、この碑の取り持つ縁で建立以来、大和町からの来町ツアーが十一回に及んでいる。これも羽田野耕三を中心にした初代の遺徳である。尚、大正初期に結成せられた他の県人会は景気のはい退と一緒に消えていった。

六 朱円に於けるビート、亜麻の耕作先駆者

一、大正十四年十二月、釧網線のうち最後の止別と斜里とが繋がり、漸く待望の網走を経ての道央以南方面への鉄道による貨物輸送の途が開けた。それまで海によって繁昌してきた斜里の下街も急速に上街に移り今日の基をなしていった。

農業の方でも輸送ばかりでなく、この開通に大きな大きな期待をかけていたのが、当時帯広に製糖工場を操業していた日甜と、農業指導に係りをもつ各機関であった。日甜は早くから広い耕地の斜里を一大生産地にすべく、策を練っていたし農会でも農家が生活し得る販売作物のない現状から脱出するには、契約栽培で価格の安定したビートの導入を斜里村農家の唯一の生きる途と考えていた。処がそのビートの最大の魅力である千斤

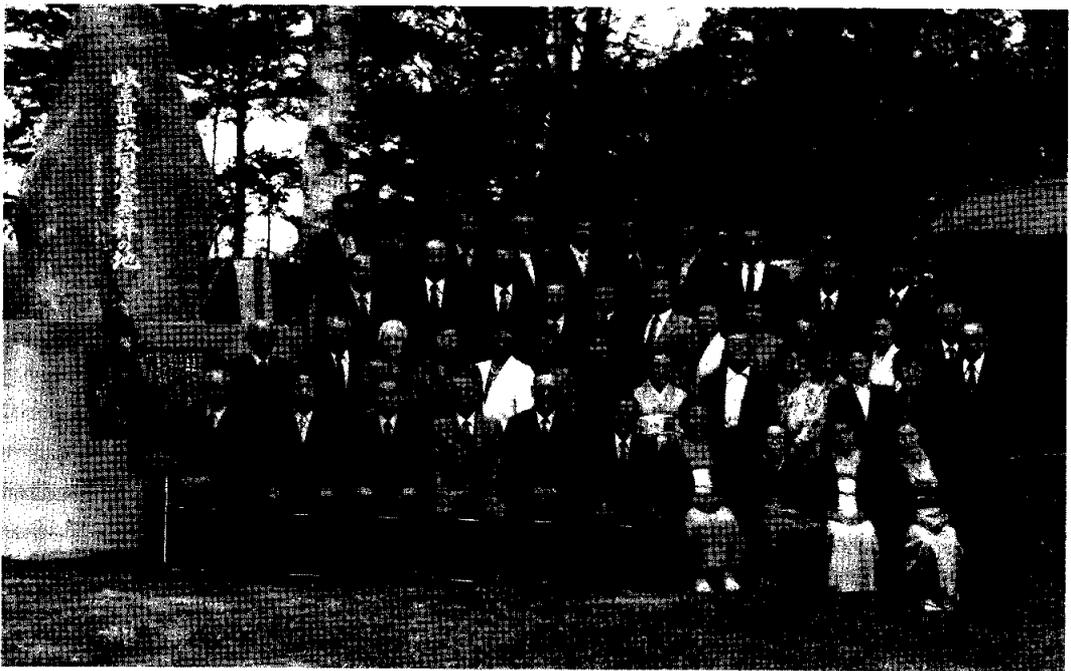


写真3. 岐阜県一致同志会結成70周年記念、昭和59年6月10日。

(600kg)斜里駅渡し七円も耕作上の作業は芋や、小麦や、豆類に比べるとそもそも手間や労力のかかるものであったし、その上発芽時から間引終了後までの稚苗期の風害を考えると、そんなに容易に飛びつける作物でなかった。そこで会社も農会も保険勧誘員が加入者の目星をつけるように大正十四年の耕作者を大栄と朱円に絞り、その地区の農事改良組合長に先ず懇請し耕作者を募って貰い村としてスタートを切ったのであった。

組合長の彼は密かに考えて、風防林は年々大きくなる、そのうち風害も少なくなるだろう。ピートを作って茎葉を耕し込んで地力を維持する。この途を選ぶのに躊躇は不要と決心し、自らも六反、石川小平、日置仙助各三反、羽田野藤次郎(現在の菱川利美の前者の小作)五反を先頭を切って実行したのであった。翌年からは村内各地で耕作せられるようになった。

二、亜麻についても同様。ここの農家は(特に斜里町の農家は)広い耕作面積に恵まれていた関係で手間の掛らない単一作物の栽培に慣されてきた。亜麻は収穫が早く夏期の生活費向け作物としては重宝がられたが、矢張り人手間がかかり、小面積と言うことで組合長がどんなに声をかけても成功しなかった。でも彼は責任上、(昔の基本地)の誰かの土地を借りて耕作したが私は極く若い頃頼まれて手伝いにいった記憶がある。

七 教育関係

一、東朱円特別教授場(峰浜小学校の前々身)の開設

羽田野耕三はその第一歩を明治三十八年現在の峰浜東十線に下ろした。然し学校が無いので翌年朱円に転住その移住民としての辛い体験から早く峰浜に学校をとの望みを持ち続け選ばれて時の総代になるや、明治四十四年の総代会に提案し、承認されウナベツの佐藤勇吉の家屋を借りて朱円特別教授場として開設せられ今日の峰浜小学校としてスタートした。

二、学務委員(今の教育委員)大正五年以来十余年

彼の就任した頃が村内の各学校で(主として教室)施設と児童数の最もアンバランス時代で朱円小学校を例にとってみると、大正五年児童数二〇八(三教室)、大正六年二四三(四)、大正七年二

七四(五)、大正八年二八一(五)と云うように酷い年には一教室七〇人にもなっている。教員もその通り訓導の資格持ちは校長のみが多かった。そのような時代の村会議員や、学務委員はどのよにして子供達にすこしでも学校らしい教育の場を与えるかに大変な苦労があったと思う。十分な教育の出来るような状態ではなかった。

三、PTA会長 昭和十三年以降三期六年間

村会議員を始め、前年設立された農事改良実行組合、産業組合などの重責を担いながらここでも彼の出番が待っていた。何度も書いたが、その頃の朱円小学校は、春の風害で作物は播いた種子が吹き飛ばされ、連日紅塵万丈 為に学校では大正六年五月から大正十二年六月までの丸六年間に校長が五人代わっている。住める所でないと落ちていて教育に当たらなかつた。中には大きな家財物は解かなかつた人も居たと言う。

そこで第七代伊藤栄太郎校長が、事情が有って不退転の決意で着任し先ず第一に強風で表土が吹き飛ばされ穴だらけの状態が何年も以前から続いているグラウンドを校舎の裏の学校用地に変更した。第二にその跡地に樹種を選ばず一坪一本の植樹を実行し逐次桜に植え変えていった。その三に教員の資格者の一名増員採用を成功した。更に教員の住める住宅に改装した。この何れもが難儀であったが、特にその三と四については羽田野村議(PTA)会長の校長に対する絶大なる協力によって実現したものであった。

八 殖民軌道運行組合

斜里駅前より日の出まで貨物と客トロ両面を運行し、昭和八年五月斜里運行組合を設立、初代組合長に就任し昭和十一年までその任に在ったが、ここでも初の組合運営の責任者に彼の正実な人物、力量を求めている。

九 戦没者遺族会

ここでも彼は推されて会長職を長く勤め、当時としては老令の域とみられている八十才の身に不拘、健康な体に恵まれ、昭和二十七年四月の町内遺族十七名を引率して第一回の靖国神社参拝を行っている。

その他大正初期の部長（朱円一区時代の今の自治会長）更には之も早い時代の赤上神社の総代も三ヶ年つとめている。兎に角朱円が育ってゆく過程で必要であった団体は殆ど彼の温い手を煩らはさないものはなかった。

以上羽田野耕三の歩みについて私の知る範囲のことを書いたが、別表に列記されている通り之又数多くの公、役職に就いている。そして年代的にもその何れもが創成期なるが故にその与えられた仕事を創ってゆかねばならず大役が負わされているのだ。早い話が、大木を伐り谷を埋めてレールを敷く大仕事役であったのである。何もかもその団体の向かってゆく大事なレールを彼に工夫して敷いて貰い皆で安心してその後を追って行ったのだ。だから殆どが初代の就任が多い。

羽田野耕三は健康な人であった。特に健脚のようであった。七十才代に夫婦で富士山登山を決行したそうだ。明治四十年総代に出てから昭和八年客トロが運行されるまでの二十六年間は朱円から斜里までの海岸廻り道十kmを歩き通しだったのだ。三号道路（斜線から西一線まで）が夏のうち人間が歩けるようになったのは昭和二年片側排水

工事が行われ以降のこと、一号の大排水ぶちの泥炭道の上が歩けるようになったのもその一年前、何れにしても朱円から斜里まで歩いて通った回数は開拓百二十余年間、朱円に居を構えた人のうち、羽田野耕三が第一でなかろうかとも私は思う。

（職業の通送人は除く）

さきに羽田野耕三はレール敷き役と言ったが今日の人はこの先人達の苦勞して敷いてこられたレールの上の車を脱線（まずあるまい）しないように、そしてその積み荷運びするのが、仕事であろう。だからその責任の重たるや、比であるまいと思う。私は自分の住む朱円を始め、斜里町の郷土史に深い関心を持っているが羽田野耕三を朱円をつくってくれた第一人者として心から尊敬と感謝している一人である。

他の公役職

斜里管内小作調停委員 釧路地方裁判所長
昭和五、七、九～十一、十三～十八、二十一年

管内金銭債務臨時調停委員 釧路地方裁判所長
昭和十一、十三、十五、十八年度



写真4. 羽田野耕三80才、妻けい77才。



写真5. 羽田野家の墓。今より326年前の延宝3年（1675）郷里岐阜県八幡町で作られたものを朱円墓地に移設。

斜里村現地目反別調査臨時委員
大正十年七月四日 網走支庁

斜里村特別税反別割付加等級並 現地目調査臨時委員
大正九年五月十八日 網走支庁

斜里村基本財産造成地調査臨時委員
大正十年七月四日 網走支庁

斜里村土木工事監督臨時委員
大正十一年四月十三日 網走支庁

斜里村戸数割賦課資料調査臨時委員
大正十一年五月一日 網走支庁

土地賃貸価格調査囑託員
大正十五年十二月一日 札幌税務監督局長

家屋賃貸価格調査員
昭和四年四月十五日 斜里村役場

経済厚生計画実地委員会委員

昭和十一年五月二十五日 斜里村役場

北海道農産物検査委員
大正九年四月一日 北海道庁

朱円駐在所勤務ヲ命ス
大正九年八月二十四日 北海道農産物検査所

推薦状 羽田野耕三様 本会名誉会員ニ推薦ス
大正十年五月一日 帝国在郷軍人会斜里村分会

このように羽田野耕三はその生涯、皆に頼られて、夫々その団体の先頭に立ち、歩む道を自ら伐り拓いた人である。段取りの出来た椅子の上に腰掛けて時を過ごした人でない。随って身心共に人一倍の辛勞が多かったことだろうが幸いにして、その年代としては長寿を保たれ昭和三十三年五月二十九日八十七才で、自らが心魂を注いで創り上げた懐かしい朱円の土地に自宅で静かに静かに還ってゆかれた。將に巨星地に墜つた感であった。以上

永野酉吉の教育と産業組合にかけられた情熱

一 朱円の夜明け、学校が出来るまで

明治三十一年北海道が殖民地解放（移民導入）になるや、本州各地から新天地を求めて移住民が潮のように押し寄せてきた。本町でも正式の入地二番手として明治三十二年以久科南に石川芳次（千葉県）高橋菊太郎（岩手県）を皮切りに入地者が増えていったが、朱円西はそれより二十二年も早い明治十年、これも岩手県人で武士出身の鈴木養太によって開拓の初鋤が下され、以後養太を頼って年々西区に腰を落ち着く者が増え、他部落の各地に開びやく以来の炊煙が初めて上った頃には、二十戸程の集落が形成されていた。

当然のこととして移住者の増加に伴い、児童数も急増し、部落創りと併行して教育問題も対処しなければならぬことになった。とは言いながら当時の貧弱な村の行財政力では到底叶えられず教員一人の確保がやっとと云う状態であった。然し幸いにして西区には鈴木養太とゆう人一倍の教育



写真6. 飽寒別尋常小学校第3回卒業式, 明治45年3月.

熱心者が居て、国許から呼んだ家大工専門の新沼才造が三年がかりで建てた。附近住民の假住い家に比べると桁違いの御殿のような四十九坪の豪壮住宅を校舎に寄附する美挙によって、明治三十三年八月一日、生徒数三十三名で飽寒別簡易教育所が(現西区栗沢卯助住宅跡)開設せられた。

この教育所は村内部落の第一号で通学区域など特別になく、児童は朱円を始め、遠く越川、以久科からも道もない通り易い兔道で通学していた。一方明治四十年頃になると、村内でも農耕最高適地の朱円も八十戸余の戸数に増し、更に年々増加、同様に児童数も増し養太寄贈の住宅改造校舎では収容不能になった。そのことは開拓の進歩、部落の発展として喜ぶべきことでここで漸く村でも二教室に他の室を具える独立した校舎を北隣に新築し、児童数一〇一名を以て、明治四十二年七月二十一日、校名も飽寒別尋常小学校と改名昇格開校され、初代校長に本州福島師範出身の永野西吉が着任した。以後博識情熱家の永野西吉は学校創成期の本職に心魂を傾注するのみでなく、開拓途上の部落創りの難しい渦の中にも自ら進んで飛び込み昼夜の別なく両方に献身的な心血を注いだ。偉大な人である。以下その尊い足跡を辿って彼を偲

んでみる。

二 永野西吉の人物像

大正三年から始まった第一次欧州大戦(オーストリア皇太子がセルビアで暗殺されたのに端を発して)はヨーロッパ全土に拡大し、為に食糧不足に陥り、その補給に北海道産の青豌豆、大手亡、小手亡、澱粉が充てられ、これらの農産物は驚異的な価格に暴騰した。例えば青豌豆60kg一俵と秋田上白米一俵に味噌45kg一樽とが交換出来ると云うまさに夢のような世界が北海道農村に到来した。

情報過疎の当時のこととして殆どの農家はこの好景気がいつ迄も続くものと誤信し、将来に向けての備えなど考える余裕は残念ながら少なかった。その顕著な例として澱粉生産には馬鈴薯を機械で摺り潰し、それをろ過、その溶液を水で薄め、攪拌、沈殿、固形物を折りて乾燥と云う工場を作らねばならない。たとえ自家生産の工場でも小規模であっても、動力が水車であろうが馬廻しであろうが一通りその工程を具えた工場を作らねばならぬ他方一時貸し付けを受けたShaの荒山は五ヶ年に80%の4haの開墾検査に合格しなければ土地は貰えないのだ。それは農家になるための至上命令で

ある。

処がその大仕事を抱えながら、他方無理して工場建設に走り、大工も居ない、木工場もない中を全部自力で夜も十分に寝ない位に働き通しながら志を遂げられない人が大勢あった。大正七年には斜里町内に殆ど自家生産ながら澱粉景気の夢を追って澱粉工場が水、馬廻し合わせて一〇五工場出現したがこの三分の一位は景気の後追いで終わったようである。結局この天国へ上ったような好景気も大正七年十一月欧州大戦の終焉によって終りを告げ本道農村は火の消えたような空気に一変した。そればかりでなく、この好景気は農村に経済的な組織を持つとゆう大事な着眼を忘れさせ、資材や資金、生活費の借り入れを市街の商人に依存し、収穫物の販売は全部その商人に任せる所謂「商人の言いなり」で取引された。

この現状に早くから密かに心を痛めていた憂郷の士が朱円に二人居た。それは広島団体長として朱円東高台に大正三年入地した山田諄一と小学校長の永野西吉である。二人は常に声を大にしてこんな景気は長く続かない、戦争が終れば必ず不景

気が来る。その時に備えて、お互いの協同の力で自らの経営と経済を護る産業組合設立の要を叫び続けたのであった。お陰で大正七年会員二十二名を以て朱円産業組合が誕生したのであった。これは網走管内三組合の中の一と云う輝しい先見の設立である。組合長に山田諄一、監事に永野西吉他一名、理事は筆頭の羽田野耕三他四名であった。

この設立された大正七年は未だ雑穀景気に煽られた時代であったので役員総出で会員の募集に努め、年々増加していったが、景気下降に引続いて当地方は気温の上昇期に入り菜種や豆景気で官林境いまで伐り尽して開墾した畑は砂漠のようになり春の強い南風の毎日の吹きまくりで高台乾燥地の営農は成り立たなくなり、組合員の経済は極度に悪化、為に当然の影響として組合の経営も至極困難な状態に陥った。

そこで大正十一年の乗り切り総会には永野西吉が二代目組合長に選ばれ、羽田野耕三筆頭理事が外部債務整理折衝、役員無報酬の全く犠牲奉仕で、再建に奔走し続け次に来る昭和四年十二月設立された斜里村を一九とした斜里産業組合誕生の母体



写真7. 昭和10年当時の斜里産業組合役員。前列右から代表監事・永野西吉、専務理事・清田清一、常務理事・羽田野耕三、監事・船津太郎、後列右から理事・宮本行男、監事・三宅藤太、監事・上本卯作、理事・西部柴太郎。



写真8. 永野校長第2回謝恩会, 昭和9年2月11日. 現存者, 最後列右より2人目, 羽田野北雄94才.

まで漸く漕ぎ着けたのである。そのようにして顧みると永野西吉は大正五年頃より昭和四年までの十四年の長きに亘り、朱円産業組合の提唱、設立、運営の中心人物として活躍された人であることが明確になった。

処がである。永野西吉は元々教育者である。先にも書いたが明治十二年福島師範を卒業し明治二十六年渡道、後志管内で教職につき明治四十二年開校の飽寒別小学校長に着任し、専門職の少ない部下を指導し、増え続ける児童と狭溢な校舎に頭を悩まし続け、遂には校舎を現地か、又は朱円中央の中区に移転新築かの難問題のため、朱円が二ツに割れ、村当局でも話し合いがつかず、遂にはその時代としては異例の支庁長の現地調査で漸く現在の朱円に決したとゆう難しい時期にも遭遇し、大正五年新築移転後三度校名を朱円尋常小学校と改名し出発したが、その時でさえ三学級で生徒数二〇七名であった。今日では到底想像つかない無理な状態の中、永野校長は大正六年四月まで勤めている。

尚その間、明治四十四年以降、東朱円（今の峰浜）遠音別（今のウトロ）越川の特別教授場の本校の立場を保つ責任も重加されていた。大変なことであったと思う。そればかりでなく、大正七年

東朱円特別教授場が朱円小学校の傘下を離れ、小学校として独立するに及んで引続いて東朱円小学校長となり大正十年迄、朱円西区の自宅から当時のこととして今日では到底想像も出来ない悪路とウナベツの熊の巢林の中を通いつめたのである。尚、永野が大正七年東朱円小学校長に就任し、大正十年同校長を辞職するまでの丸三年間にこの朱円校では春の土を巻き上げた強風に耐えられなくて三人の校長が変わっているが、信念の人、永野西吉はそのような酷い中を東朱円まで朝夕、歩き通したのであった。偉い人と云う言葉では足りない人である改めて顧みると永野西吉は朱円の学校教育、創成期の重責を果しながら、一方では農村経済荒廃の渦中に在って産業組合経営の中心者として血の滲むような働きも続けている。片方丈でも容易でないことが今日の平穩時代直感出来るのに、將に超人間的と言い得よう。そして更に今日の我々に宿題を残したことは、教育と部落創りの先頭に同一人が当たったことである。それはその時代が求めたころでもあろうし、又周囲でも認められたと考える。それ丈に永野西吉はそれに応え得る偉大な人物であったことに相違ない。

その後、永野は昭和四年設立された斜里産業組合の代表監事として昭和十一年まで勤めているし

大正十四年から四年間村会議員の要職にも就き、村発展の為に貢献している。永野西吉は学校は生まれただけで、部落はやっと一人歩き明治四十二年、縁あって朱円の人となり常にその指導者としての重きを貫き、四十年の長きに亘る滅私の努力は朱円発展の為に限りない尊い足跡を遺してくれた偉大な人である。年令を重ね公務引退後は西区の自宅でお老後を送り昭和二十三年二月八日八十八才で自ら築き上げた朱円の土に還っていった。世間では引退後は楽な道を選ぶのが通例であるが彼は最後まで有意義な人生を送る道として自宅より僅かに離れた所有地内に可成り広面積の梨と林檎の果樹園をつくりその育成に情熱を傾け、又自宅前には池を掘り、魚を放ち周囲には各種の果樹を植え自ら手入れすることを日課として楽しむなど、最後まで徒食の出来ない人であった。

大正六～十年頃の永野西吉が西区の自宅から峰浜小学校へ徒歩で通いつめた三年間に必ず苦勞のあったことを想像すると

一、酷い雨風の日、穿きものや、雨覆いは、何だったろうか、今日のようにビニールもゴム製品の全く無い中、凡らく峰浜の学校へ着いたらビショビショのことが度々あったろう。

二、伐り尽くして風防林の無い途中の道、冬の吹雪に立往生したろうし、息も出来ぬ位飛んでくる土埃の中、東区あたりの難所をどう歩いて行ったろうか、苦しい立ち往生の姿が想像出来る。



写真9. 永野家の墓。岐阜県八幡町出身の本職石工長屋丈太郎（現長屋水道の初代）の作（朱円墓地）。

三、何日間もの吹雪もおさまったが道を開ける人が居ない、凡らく永野がテシマで歩いたその道が峰浜までの初道になっただろう。昭和の初めでも配達さんが歩いたので道が開いたと言われた位だから。

四、今の坂井さんの北の低地帯は大密林で熊の巣だった。幾度か立止まったことがなかったろうか。

兎に角、常人で出来ぬことである。